

「シニア海外ボランティアOB」

# 川口 孝太郎さん

KAWAGUCHI Kotaro

## 長年持ち続けた夢を バヌアツで実現

キラキラと輝く太陽、どこまでも続く青い海。時間がゆっくりと流れ、あくせく働かなくても衣食住に困ることはない南の島国。ここバヌアツは、森に入れば果物が豊富に実り、家はバナナの葉で簡単に造れ、1年中寒さに凍える心配もない。

「彼らの生活こそ、本当に豊かだといえるかもしれない」。そう話すのは、2009年までの2年間、シニア海外ボランティアとしてこの国で活動していた川口孝太郎さん。実は川口さんは、北海道・栗山町の町長を務めた経歴の持ち主だ。

# JICA Volunteer Story

**PROFILE**  
1941年北海道出身。大学卒業後、64年北海道庁に入庁。74年から1年間、フランス政府給費留学生としてフランスに留学。98～2006年、北海道夕張郡栗山町長。07～09年、シニア海外ボランティア(都市計画アドバイザー)でバヌアツへ。現在、札幌学院大学大学院客員教授。

# 「将来を見据えた 都市計画の重要性を伝えたい」

南太平洋の島国バヌアツの首都ポートビラでは、近年人口が増加し、たくさん都市問題を抱えていた。その解決に向けて派遣されたシニア海外ボランティアが、元北海道栗山町長という異色のキャリアを持つ川口孝太郎さん。都市計画づくりの重要性を伝えるために尽力した。

国際協力に興味を持ち始めたのは高校時代。アフリカでの医療活動に人生をささげたシュバイツァー博士の伝記を読んで感動し、いつか自分も海外で人の役に立ちたいと考えていた。そのために技術を身につけようと大学で土木工学を学んだ後、北海道庁に就職。主に都市計画づくりを担当し、トンネルや道路設計のほか、道内の212の市町村の都市計画の審査などを行った。この間も海外への関心をずっと持ち続け、1年間のフランス留学で都市計画について学んだり、ロンドンやベルリンなど世界の都市を視察して回ったこともあった。

その後、川口さんは生まれ故郷である栗山町長として地元のために力を尽くす道を選ぶ。1998年の就任以降、財政再建を中心とした施策を実行。02年のFIFAワールドカップ・日韓大会ではメキシコチームのキャンプ地誘致を推進するなど、国際交流の視点も取り入れながら街づくりに取り組んだ。

地元に貢献する仕事にやりがいを感じながらも、海外で人の役に立ちたいという思いがずっと心にあった川口さん。「まだ夢はかなえられる!」。町長の任期を全うした後、ついに念願のシニア海外ボランティアに応募。行政の経験を生かしてバヌアツの首都ポートビラの都市計画づくりをサポートすることになった。

**都市計画の大切さを  
知ってもらいたいことが出発点**

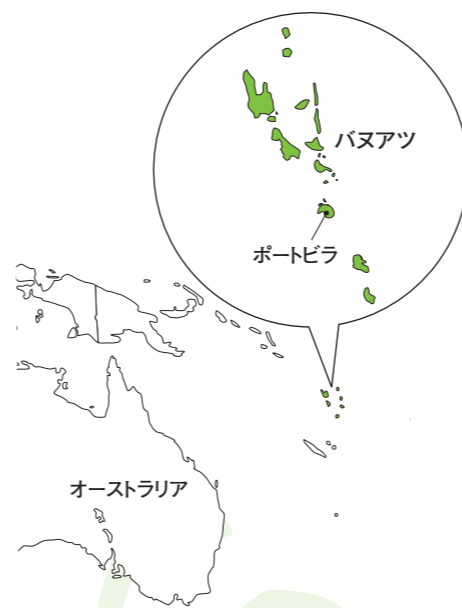
だが、川口さんを待ち受けていたのは予想外の状況だった。「首都ポートビラは急激な人口増加により、電力や水、住宅が不足し、交通渋滞も日常茶飯事。多くの都市問題に直面していました」。その深刻さは、都市計画に長年取り組んできた川口さんには一目瞭然だった。一方で、派遣先である内務省の職員たちには危機感すらなかった。「都市は計画に基づいて自分たちでつくっていくものだ」と説明しても、『なぜ?』『何のため



a.各省庁の幹部に都市計画の改訂作業についてプレゼンする川口さん。相手に親近感を持ってもらいたいと、できるだけピスマラ語を使うように努めたという  
b.“レインボープラン”の設計図。交通渋滞緩和のため、黄色の点線で示される環状道路の建設を提案。赤線は既存の道路  
c.首都ポートビラでは人口増加により交通渋滞が頻発。新たな道路の建設が求められている  
d.継続する大切さを伝えたいと、バヌアツに派遣中の2年間、週3回地元の若者などを対象に「剣道教室」を開いていた川口さん。お祭りで、教え子たちと剣道を初披露



川口さんが配属された内務省施設整備課の課長や担当職員と地図を囲み、都心の交通渋滞対策などについて話し合う



に?』と言われてしまった。この国には都市計画という概念がなかったのです。」

そこで川口さんは、英仏に統治されていた60年代に作られた「ボールプラン」という都市計画を街の現状に合わせて改訂し、それを通じて計画の必要性をバヌアツの人々に伝えていくことにした。しかし、「統計資料、対数表、コンパス、定規など、街の設計図を描くための道具は、一切ありませんでした」と当時を振り返る。そこで実践したのが、これまでの経験で培った「現場主義」。自分の足で実際に街を歩き、住宅地、商業地、工業地と、区画ごとに面積や人口密度、交通量などのデータを集めることからスタート。地道な作業の末、人口は09年の4万人から2030年には約7万人、車の台数は今の3倍、観光客も増大するという予測に基づき、ポートビラの20年後を見据えたマスタープランを策定した。

その中で川口さんは、地震国で津波被害にも遭いやすい実情を考え、住宅地は高台にすることを提案した。また、交通渋滞の原因の一つである道路不足の解消には、街の外周に環状道路を建設することをアドバイス。「道路の形状が虹の形に見えたから」と、このマスタープランを「レインボープラン」と名づけた。

さらに、市議会議員、市長、省庁の幹部、メディアなどに積極的にレインボープランについてのプレゼンテーションを行った。「まず多くの人に知ってもらうことが、都市計画の必要性を理解してもらう第一歩だと思いました。結果、テレビや新聞でも報道され、次第に人々が興味を持ち始めたのです。」

現地語のピスマラ語を積極的に勉強したり、剣道を教えることでも人々と交流を深め、日本とは違う価値観を学んだ川口さん。帰国後は、札幌学院大学大学院の客員教授として街づくりも含む行政学とともに、「違う価値観を受け入れる柔軟な考え方が大切だ」と学生たちに伝えている。